

山武市埴谷古墳群

— 北総中央農業水利事業2号調整水槽工事に伴う埋蔵文化財調査報告書 —

平成23年3月

関東農政局北総中央農業水利事業所
財団法人 千葉県教育振興財団

さん む はに や
山武市埴谷古墳群

— 北総中央農業水利事業2号調整水槽工事に伴う埋蔵文化財調査報告書 —



序 文

財団法人千葉県教育振興財団（文化財センター）は、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県教育振興財団調査報告第663集として、関東農政局北総中央農業水利事業所の平成21年度北総中央農業水利事業2号調整水槽工事に伴って実施した山武市埴谷古墳群の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、周知の古墳群である埴谷古墳群に関わる遺構と遺物や、縄文時代早期の土器群が発見されるなど、貴重な成果が得られております。

刊行に当たり、この報告書が学術資料として、また埋蔵文化財の保護に対する理解を深めるための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々をはじめとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦勞をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成23年3月

財団法人 千葉県教育振興財団
理事長 赤 羽 良 明

凡 例

- 1 本書は、平成21年度北総中央農業水利事業2号調整水槽工事に伴う埋蔵文化財調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は、山武市横田字日除687-2ほかに所在する埴谷古墳群（遺跡コード 237-003）である。
- 3 発掘調査から報告書刊行に至る業務は、農林水産省関東農政局北総中央農業水利事業所の委託を受け、財団法人千葉県教育振興財団が実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業の担当者および実施期間は、第1章に記載した。
- 5 本書の執筆は、主席研究員兼副所長 相京邦彦が担当した。
- 6 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁教育振興部文化財課、山武市教育委員会のご指導・ご協力を得た。
- 8 本編で使用した地形図は、下記のとおりである。
 - 第1図 国土地理院発行 1/50,000 地形図「成田」(NI-54-19-10)・「東金」(NI-54-19-11)
 - 第2図 国土地理院発行 1/25,000 地形図「多古」(NI-54-19-10-2)・「成東」(NI-54-19-11-1)を1/30,000に縮小
- 9 周辺地形航空写真は、京葉測量株式会社による平成15年撮影のものを使用した。
- 10 本書で使用した図面の方位は、すべて座標北である。座標値は日本測地系を使用した。
- 11 遺物の色調については、農林水産省・(財)日本色彩研究所監修、日本色研事業株式会社発行「新版標準土色帖」1988年 掲載の用語を使用した。
- 12 本書で使用した遺構番号は、調査時の番号を踏襲した。須恵器は断面に墨入れを施した。
- 13 本書では、古墳の略称としてSMを使用した。

凡 例

本文目次

第1章 はじめに	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 遺跡の位置と周辺的环境	3
第3節 調査の方法	8
第4節 基本層序	10
第2章 検出された遺構と遺物	11
第1節 縄文時代の遺物	11
第2節 SM001	18
第3節 SM002	20
第4節 古墳時代の遺物	21
第3章 まとめ	22
報告書抄録	巻末

挿図目次

第1図 遺跡位置図	2	第9図 縄文土器（1）	14
第2図 周辺的主要な古墳群と遺跡	5	第10図 縄文土器（2）	15
第3図 埴谷古墳群分布図	7	第11図 縄文土器（3）	16
第4図 上層確認トレンチ配置図	8	第12図 縄文時代石器	17
第5図 下層確認グリッド配置図・下層土層断面図	9	第13図 古墳検出状況図	18
		第14図 SM001検出状況図・土層断面図	19
第6図 縄文時代早期土器集中範囲	11	第15図 SM002検出状況図・土層断面図	20
第7図 縄文時代早期土器出土分布図	12	第16図 古墳時代の遺物	21
第8図 縄文土器片円板	13		

表目次

第1表 境川周辺の古墳群と主要な遺跡	4	第3表 遺物観察表（土師器・須恵器・埴輪）	21
第2表 遺物観察表 縄文時代（石器）	17	第4表 埴谷古墳群 古墳一覧	23

図版目次

- | | | | |
|------|----------------------|------|------------------|
| 図版 1 | 周辺航空写真 | | SM002西側周溝全景 |
| 図版 2 | 調査前近景 | | SM002周溝覆土残存状況 |
| | SM001周溝全景 | 図版 6 | トレンチ内遺物出土状況 3T |
| 図版 3 | SM001西側周溝全景・土層断面C-C' | | トレンチ内遺物出土状況 10T |
| | SM001周溝土層断面A-A' | | 下層土層断面 13T |
| | SM002東側周溝検出状況 | | 調査区全景（水槽本体部分） |
| 図版 4 | SM002東側周溝全景 | 図版 7 | 縄文土器（1） |
| | SM002東南側周溝全景 | 図版 8 | 縄文土器（2） |
| 図版 5 | SM002土層断面A-A' | 図版 9 | 縄文土器（3）・縄文土器片円板・ |
| | SM002土層断面B-B' | | 縄文時代石器・古墳時代の遺物 |

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯（第1・2図、図版1）

1 調査の経緯

国は食料需要に対応できる供給力を確保するため、食料生産の中核を形成する優良農業地域を対象に、受益者の申請に基づいて国営事業を実施している。優良農業地域を支える農業用水は、ダム、頭首工（湖沼、河川などから用水路へ必要な用水を引き入れるための施設）から用水路、ほ場、排水施設に至るまでの一連の水利システムを形成し、地区全体の用排水計画や、営農、施設設計を含めたマスタープランを作成している。

北総中央農業水利事業所は、このような国の施策に基づき、千葉県下でも有数の農業地帯である山武市ほか7市にまたがる3,267haの農地を対象として事業をおこなっている。本地域のかんがい用水は、地下水と天水に依存しており、天候に左右される農業を余儀なくされてきた。また、当地域は地下水採取が規制されている環境保全条例の対象地域（東金市を除く）となっている。このため、利根川河口堰及び霞ヶ浦開発を水源とする北総東部用水事業で建設された幹線用水路からの引水による事業を行っている。本事業は、千葉県北部に広がる畑地帯や支線流域に介在している水田地帯に対し、安定的な農業用水の供給を図るため、揚水機場2か所、調整水槽21か所を新設し、パイプラインによって地域に送水を行うものである。

この計画に対して、事業予定地に所在する埋蔵文化財の取扱いについて、千葉県教育委員会と農林水産省関東農政局（北総中央農業水利事業所）との間で慎重な協議が重ねられた。その結果、現状保存が困難な部分については、やむを得ず発掘調査による記録保存の措置を講ずることになり、農林水産省関東農政局が事業主体となり、（財）千葉県教育振興財団が発掘調査を実施することになった。

発掘調査は、現道から給水塔までの管理用道路を含めて、上層・下層の確認調査・本調査を実施した。現道から給水塔までは長さ約100m、幅約5mの管理用道路があり、その奥に一辺約45mの給水塔（水槽本体）予定地が所在する。

上層の確認調査によって古墳周溝と思われる溝が2か所と縄文時代早期の遺物包含層が確認されたため、その周囲を拡張して本調査を実施した。下層の調査も実施したが遺物の出土はなかった。

2 調査及び整理の組織と担当

発掘調査

平成21年12月1日から平成22年1月30日

調査対象面積：2,800㎡

確認調査面積：上層 280㎡、古墳2基の周溝

下層 56㎡

本調査面積：870㎡、古墳2基の周溝

組織：調査研究部長 及川淳一 北部調査事務所長 野口行雄



第1図 遺跡位置図

担当職員：主席研究員兼副所長 相京邦彦 上席研究員 内山健一

整理作業

平成22年2月1日から平成22年2月28日

組織：調査研究部長 及川淳一 北部調査事務所長 野口行雄

担当職員：主席研究員兼副所長 相京邦彦

内容：水洗・注記から実測・トレースの一部まで

平成22年11月1日から平成22年11月30日

組織：調査研究部長 及川淳一 中央調査事務所長 白井久美子

担当職員：主席研究員兼副所長 相京邦彦

内容：実測・トレースの一部から報告書刊行まで

第2節 遺跡の位置と周辺的环境（第1・2・3図、第1・4表）

埴谷古墳群は、山武市横田地先に所在する。埴谷古墳群は山武郡九十九里町荒生納屋で太平洋に流入する作田川の支流である境川の上流域左岸の台地上に立地する。この境川に面した台地縁辺部には、北西から南東に向かって埴谷古墳群¹⁾、諸木内古墳群、胡摩手台古墳群、麻生新田古墳群、真行寺古墳群、富田古墳群、作台古墳群、小川崎台古墳群、市場古墳群の諸古墳群が連続して築かれており、埴谷古墳群はこれらの古墳群中で最も北側に位置している。また、この境川の左岸台地上には縄文時代早期から前期の遺跡がほぼ間断なく連なっている。一方、境川の南に位置する作田川の両岸には和田古墳群、板附古墳群、矢部古墳群、湯坂古墳群が所在し、これら古墳群には多くの注目される古墳が所在している。

埴谷古墳群は、昭和31年に川戸 彰によって発掘調査が行われた。発掘を実施した古墳3基に番号を付けて報告している。その後埴谷古墳群の調査は行われておらず、本古墳群の発掘調査は今回で2回目である。平成元年には山武考古学研究所による「九十九里地域の古墳の研究」が刊行され本地域の古墳群の状況が明らかとなり、埴谷古墳群もその規模などが報告されている。その時の古墳群の所在地は山武郡山武町麻生新田字金堀地先としている。今回の発掘調査を実施した地番は山武市横田字日除である。

昭和31年5月の川戸 彰によって実施された3基の古墳の発掘調査の概要は次のとおりである。1号墳は前方後円墳で全長約36m、後円部径約25m、前方部幅約22m、後円部高さ3.85m、前方部高さ3.4m、主体部は軟質砂岩切石による半地下式の横穴式石室、墳丘からは埴輪列が検出されている。埴輪は形象埴輪で武人、馬、家形埴輪が出土している。2号墳は1号墳の南約200mに所在し、径24m、高さ約4mを測る円墳である。南側裾部に軟質砂岩切石積みの半地下式横穴式石室を有している。出土遺物は土師器、須恵器、刀子、直刀、鉄鏃、人の臼歯が出土しているが、遺物実測図の報告はない。3号墳は径12m、高さ1mの小円墳である。主体部はなく、遺物も全く出土していない。

川戸 彰による発掘調査で「さらに他の1基」として紹介している前方後円墳は、今回の調査地の道路を隔てた反対側に現在も所在している。全長34mで残存しているが、北側に2か所の盗掘坑が現在も認められる。

ほかに、境川流域の古墳群の調査としては胡摩手台16号墳の発掘調査、及び真行寺古墳の調査が行われている。

埴谷古墳群は川戸 彰、平岡和夫により前方後円墳3基、円墳3基が周知の古墳として知られていたが、今回の調査で墳丘は確認できなかったが前方後円墳と円墳を各1基ずつ確認し、これらに新規発見の古墳としてSM001、SM002と番号を付した。SM002は調査の成果から周溝の形状が把握でき円墳と推定された。SM001は詳細は後述するが周溝全体の確認はできなかったが、周辺の古墳群には方墳の調査・確認例がないことから、SM001については今回調査によって検出された部分は前方後円墳の前方部と判断した。

第1表 境川周辺の古墳群と主な遺跡

No.	遺跡名	参考文献	No.	遺跡名	参考文献
1	埴谷古墳群	1・2・3・5・6	18	経僧塚古墳	9・17
2	諸木内古墳群	5・6	19	嶋戸東遺跡	18・25
3	胡摩手台古墳群	16	20	真行寺廃寺	19・20・21・22・23・25・26
4	麻生新田古墳群	9	21	真赤土遺跡	24
5	真行寺古墳群	19・20・21・22・23・25・26	22	八坂台遺跡	24
6	富田古墳群	10	23	境川A遺跡	27
7	作台古墳群	5	24	比良台遺跡	24
8	小川崎台古墳群	12	25	埴谷横宿廃寺	28・29
9	市場古墳群	10	26	妙見崎台遺跡	30
10	和田古墳群	5	27	蒲野遺跡	31
11	板附古墳群	8・14	28	東風吹山遺跡	31
12	矢部古墳群	5	29	新坂遺跡	31
13	湯坂古墳群	15	30	栗焼棒遺跡	11・32・33
14	胡摩手台16号古墳	16	31	駄ノ塚古墳	14・34
15	久保谷遺跡	13	32	不動塚古墳	7・35・36
16	小川廃寺	10	33	西ノ台古墳	8・37・38
17	カブト塚古墳	4・9	34	湯坂廃寺	15

注1

参考文献1・2・3によると、古墳から人物埴輪、須恵器、耳環、直刀の出土があった旨記載されているが、概報には遺物の実測図は全く掲載されていない。平成22年12月13日、東金市教育委員会社会教育課椎名氏と県立東金高等学校に保管されている東金市関係の考古遺物を実見する機会があった。その折、埴谷古墳群の未掲載遺物が所蔵されていることを知った。詳細調査はできなかったが、人物埴輪、耳環、須恵器などがあり、添付されているラベルから昭和31年5月に調査を実施した埴谷古墳群出土遺物と確認できた。また、そのおりカブト塚古墳の遺物の所在も確認できた。

考古学部OB会有志が発行した記念誌には、川戸が調査を行った前方後円墳の遠景写真と円墳の調査風景の写真、調査開始時のお祓いの様子、出土した耳環、須恵器の写真などが収録されている。



第2図 周辺の主な古墳群と遺跡

参考文献

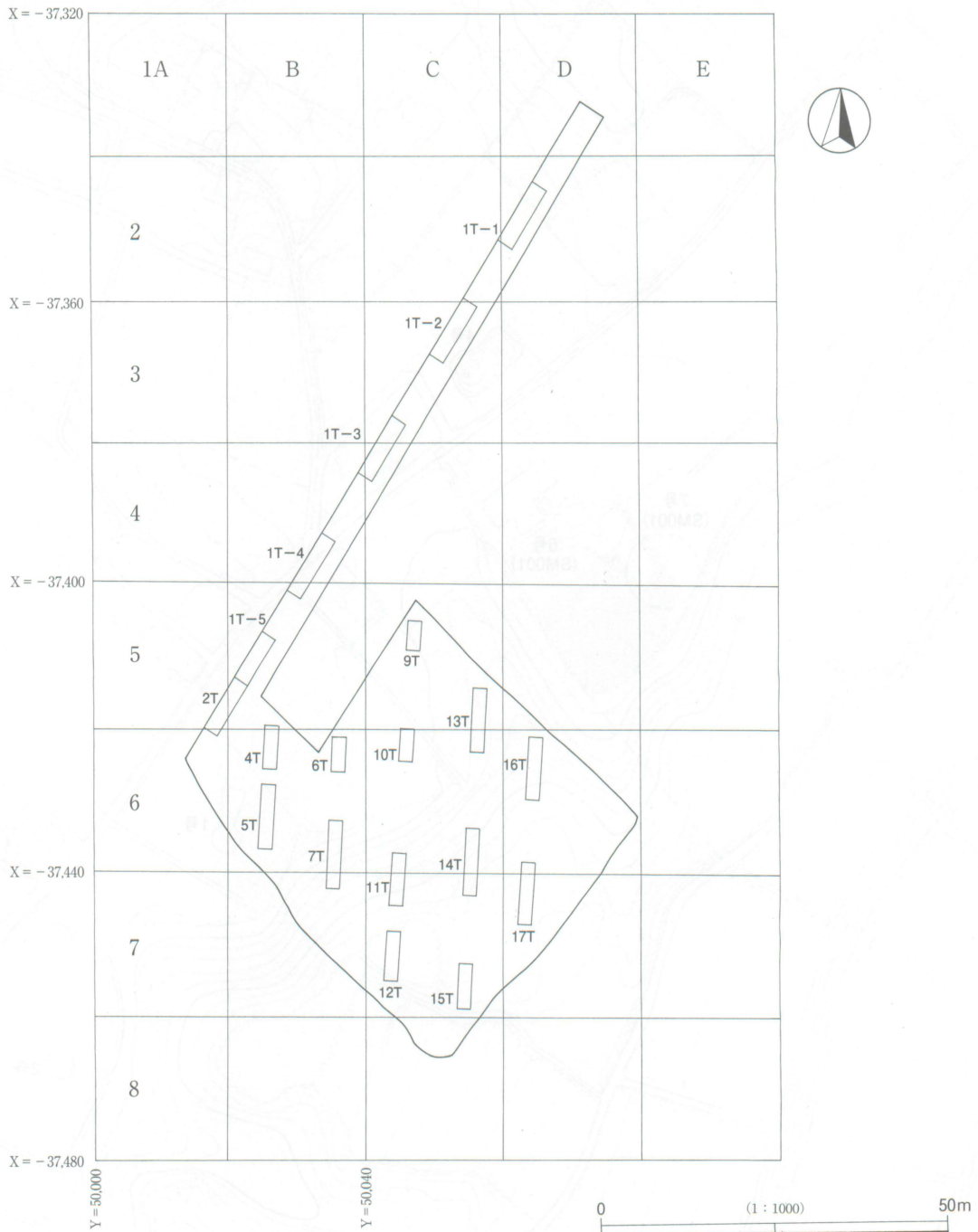
- 1 川戸 彰「山武郡山武町埴谷古墳群調査概報」『上代文化』27号 1958
- 2 川戸 彰『古墳を歩く39』東京新聞千葉版、1990年9月29日
- 3 考古学部OB会有志『私たちの考古学』千葉県立東金高等学校考古学部OB会有志 1993
- 4 川戸 彰「千葉県山武郡山武町麻生新田カプト塚」『日本考古学年報』19 日本考古学会 1996
- 5 平岡和夫『千葉県 九十九里地域の古墳研究』山武考古学研究所 1989
- 6 平岡和夫『千葉県 九十九里地域の古墳研究Ⅱ』山武考古学研究所 1993
- 7 平岡和夫ほか『千葉県山武郡成東町不動塚古墳』山武考古学研究所 1996
- 8 『千葉県重要古墳群測量調査報告書-山武地区古墳群(1)-』千葉県教育委員会 1989
- 9 『千葉県重要古墳群測量調査報告書-山武地区古墳群(4)-』千葉県教育委員会 1992
- 10 『千葉県埋蔵文化財分布地図(2)-香取・海上・匝瑳・山武地区(改訂版)-』(財)千葉県文化財センター 1998
- 11 『千葉東金道路(二期)埋蔵文化財調査報告書1-山武町栗焼棒遺跡-』(財)千葉県文化財センター 1998
- 12 『千葉東金道路(二期)埋蔵文化財調査報告書3-山武町小川崎台遺跡-』(財)千葉県文化財センター 1999
- 13 『千葉東金道路(二期)埋蔵文化財調査報告書4-山武町久保谷遺跡』(財)千葉県文化財センター 2000
- 14 白石太一郎他『千葉県成東町駄ノ塚古墳発掘調査報告』国立歴史民俗博物館研究報告第65集 国立歴史民俗博物館 1996
- 15 中村恵次他『湯坂遺跡発掘調査概報』湯坂遺跡発掘調査団 1971
- 16 萩原恭一『山武町胡摩手台16号墳発掘調査報告書』(財)千葉県文化財センター 1994
- 17 市毛勲「千葉県山武郡成東町経僧塚古墳の調査」『史観』第83号 早稲田大学史学会 1971
- 18 栗田則久他『武射郡衙跡-山武市嶋戸東遺跡総括報告書-』千葉県教育委員会 2008
- 19 沼澤 豊『成東町真行寺廃寺跡確認調査報告』千葉県教育委員会 1982
- 20 沼澤 豊他『成東町真行寺廃寺跡研究調査概報』(財)千葉県文化財センター 1983
- 21 滝口 宏他『成東町真行寺廃寺跡発掘調査概報』成東町教育委員会 1983
- 22 天野 努他『成東町真行寺廃寺跡研究調査報告』(財)千葉県文化財センター 1984
- 23 谷川章雄他『成東町真行寺廃寺跡発掘調査報告書-鍛冶工房址の調査-』成東町教育委員会 1985
- 24 山口直人他『比良台遺跡群 比良台・八坂台・真赤土遺跡』(財)山武郡文化財センター 1992
- 25 山口直人「付篇調査報告Ⅱ 嶋戸東遺跡」『山武郡市文化財センター年報』No.9 (財)山武郡市文化財センター 1994
- 26 山口直人「真行寺遺跡」『山武郡市文化財センター年報』No.13 (財)山武郡市文化財センター 1998
- 27 黒沢崇『成東町境川A遺跡-県単交通安全対策事業埋蔵文化財調査報告書-』(財)千葉県文化財センター 2002
- 28 坂詰秀一「千葉県横宿遺跡古瓦出土遺跡の調査」『古代文化』第5巻1号(財)古代学協会 1960
- 29 糸原 清「埴谷横宿廃寺」『千葉県の歴史 資料編 考古3(奈良・平安時代)』千葉県 1998
- 30 吉田直哉『妙見崎台遺跡』山武町教育委員会 2001
- 31 石本俊則他『新坂遺跡・東風吹山遺跡・蒲野遺跡・西後藤遺跡』(財)山武郡文化財センター 1995
- 32 栗田則久「千葉県の古代官衙とその周辺」『シンポジウム3 地方官衙とその周辺』日本考古学協会茨城大会実行委員会・ひたちなか市 1995
- 33 半澤幹雄「栗焼棒遺跡出土の掘立柱建物跡について」『研究連絡誌』第42号(財)千葉県文化財センター 1994
- 34 安藤鴻基他「千葉県山武郡成東町駄ノ塚古墳測量調査報告 付編 真行寺廃寺の古瓦」『古代房総史研究』第1号 古代房総史研究会 1980
- 35 軽部慈恩他「千葉県山武郡成東町不動塚前方後円墳調査概報」『日本大学文学部研究年報』第2輯 日本大学文学部 1952
- 36 軽部慈恩「千葉県山武郡板附不動塚古墳」『日本考古学年報』4 日本考古学協会 1955
- 37 軽部慈恩「千葉県山武郡西ノ台古墳」『日本考古学年報』7 日本考古学協会 1958
- 38 杉山晋作他『成東町西ノ台古墳確認調査報告書』千葉県教育委員会 1991



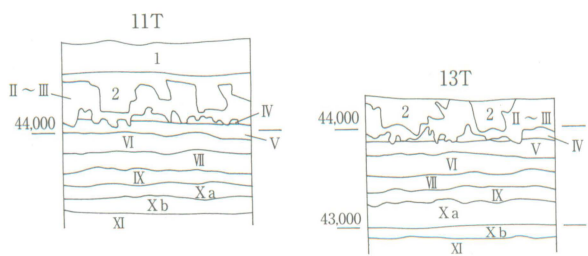
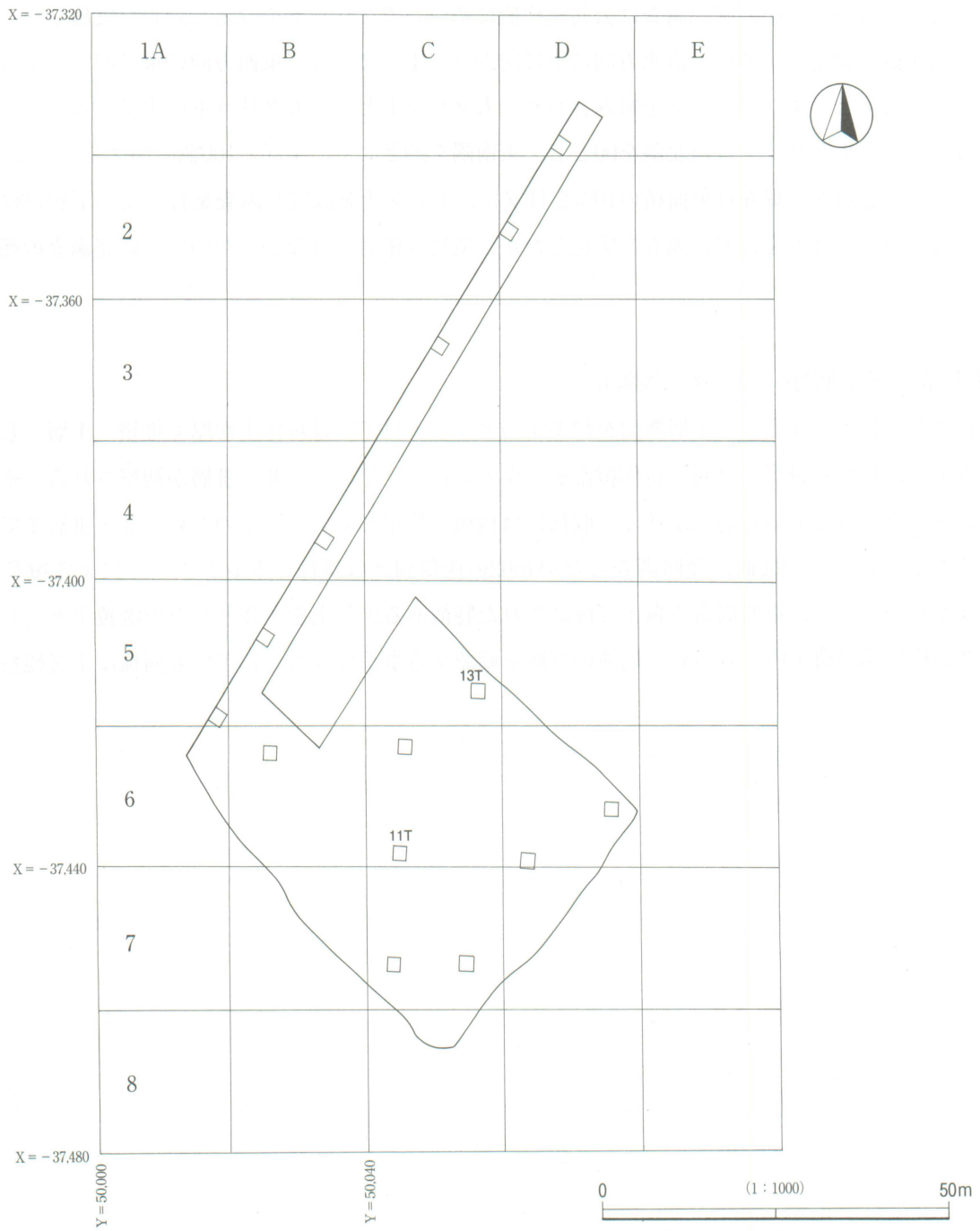
第3图 埴谷古墳群分布图

第3節 調査の方法 (第4・5図)

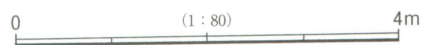
調査に先立ち、事前に調査区全域を覆うように公共座標値をもとに大グリッド、小グリッドを設定し開始するのが基本であるが、調査期間が短いこともあり、上層の確認調査のグリッド設定と発掘調査が平行して開始された。その結果、グリッドが任意の座標を基点に設定されたところもある。



第4図 上層確認トレンチ配置図



- 基本層序
- 1層 耕作土
 - 2層 耕作土基盤層
 - II~III層 軟質化したローム
 - IV層 軟質化したローム
 - V層 全体に暗い
 - VI層 ATがみられる 全体に暗い
 - VII層 乾燥するとクラックが入る
 - IX層 黒色スコリア 赤色スコリアを含む
 - X層 a bに分層 明るい
 - XI層 武蔵野ローム最上層



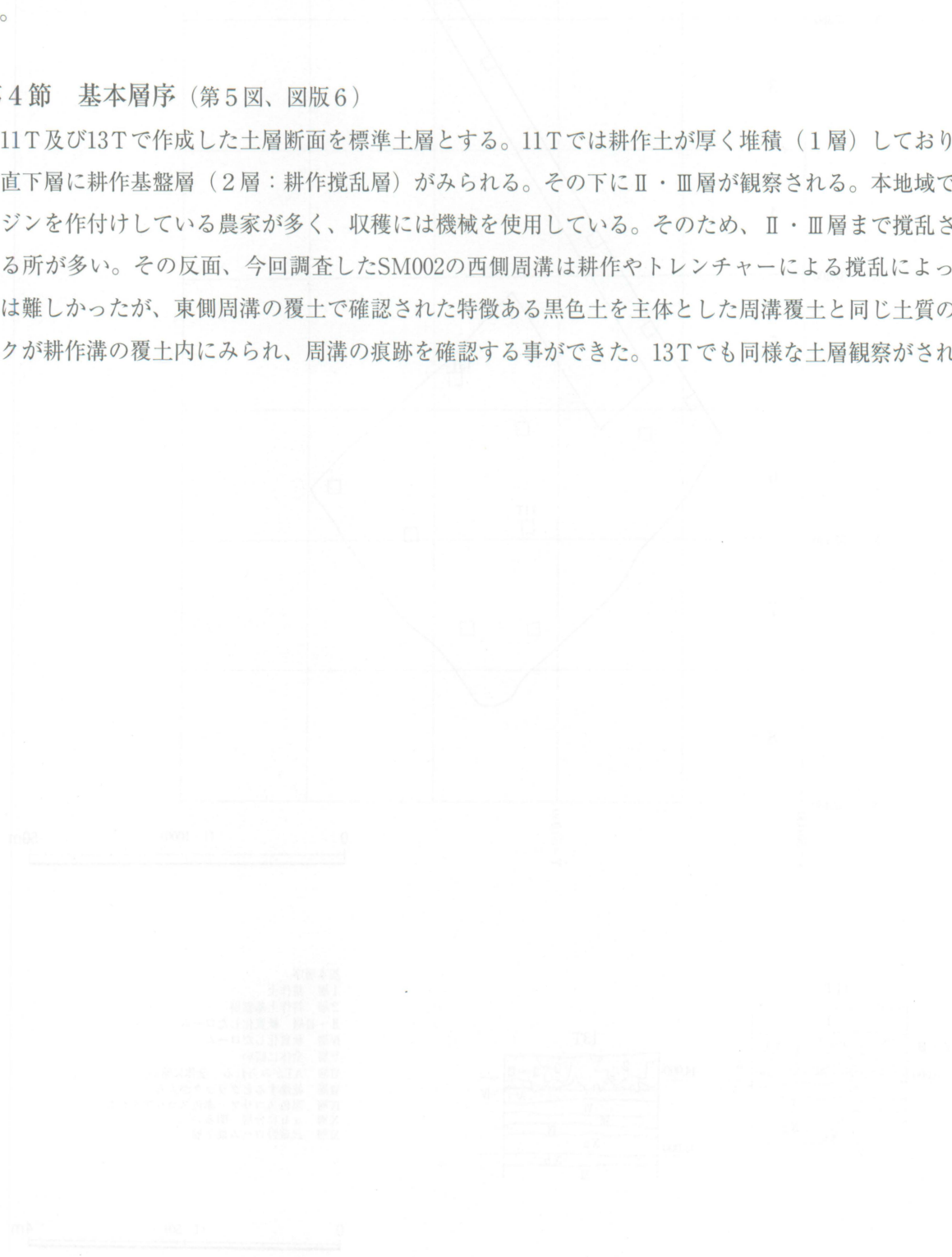
第5図 下層確認グリッド配置図・下層土層断面図

上層の本調査と下層の確認調査は公共座標値に基づいてグリッドを設定し調査を実施した。大グリッドは一辺20mで設定し、名称は南北方向に南に向かって1、2、3、東西方向に東に向かってA、B、Cとし、この数字とアルファベットを組み合わせると大グリッドとし、大グリッドの中の一辺2mの小グリッドを設置した。小グリッドは西北隅を00とし、東南隅を99として、全部で100個の小グリッドとした。

上層の確認調査は調査対象面積の10%を目安に、トレンチを設定し調査を行った。下層の確認調査は、調査対象面積の2%を目安に調査を実施したが、遺物は確認されなかったため、確認調査の範囲で終了した。

第4節 基本層序（第5図、図版6）

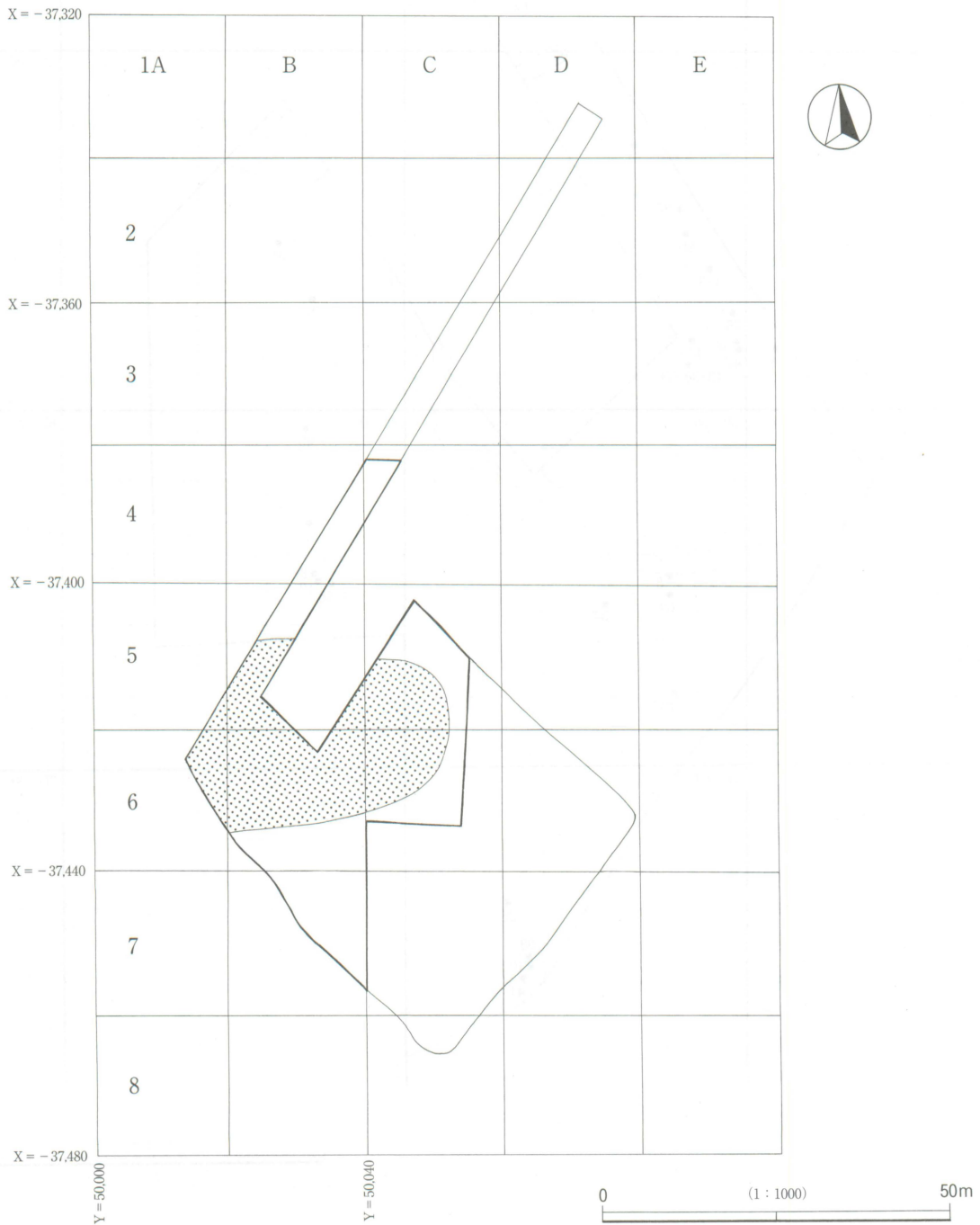
11T及び13Tで作成した土層断面を標準土層とする。11Tでは耕作土が厚く堆積（1層）しており、その直下層に耕作基盤層（2層：耕作攪乱層）がみられる。その下にⅡ・Ⅲ層が観察される。本地域ではエンジンを作付けしている農家が多く、収穫には機械を使用している。そのため、Ⅱ・Ⅲ層まで攪乱されている所が多い。その反面、今回調査したSM002の西側周溝は耕作やトレンチャーによる攪乱によって検出は難しかったが、東側周溝の覆土で確認された特徴ある黒色土を主体とした周溝覆土と同じ土質のブロックが耕作溝の覆土内にみられ、周溝の痕跡を確認する事ができた。13Tでも同様な土層観察がされた。



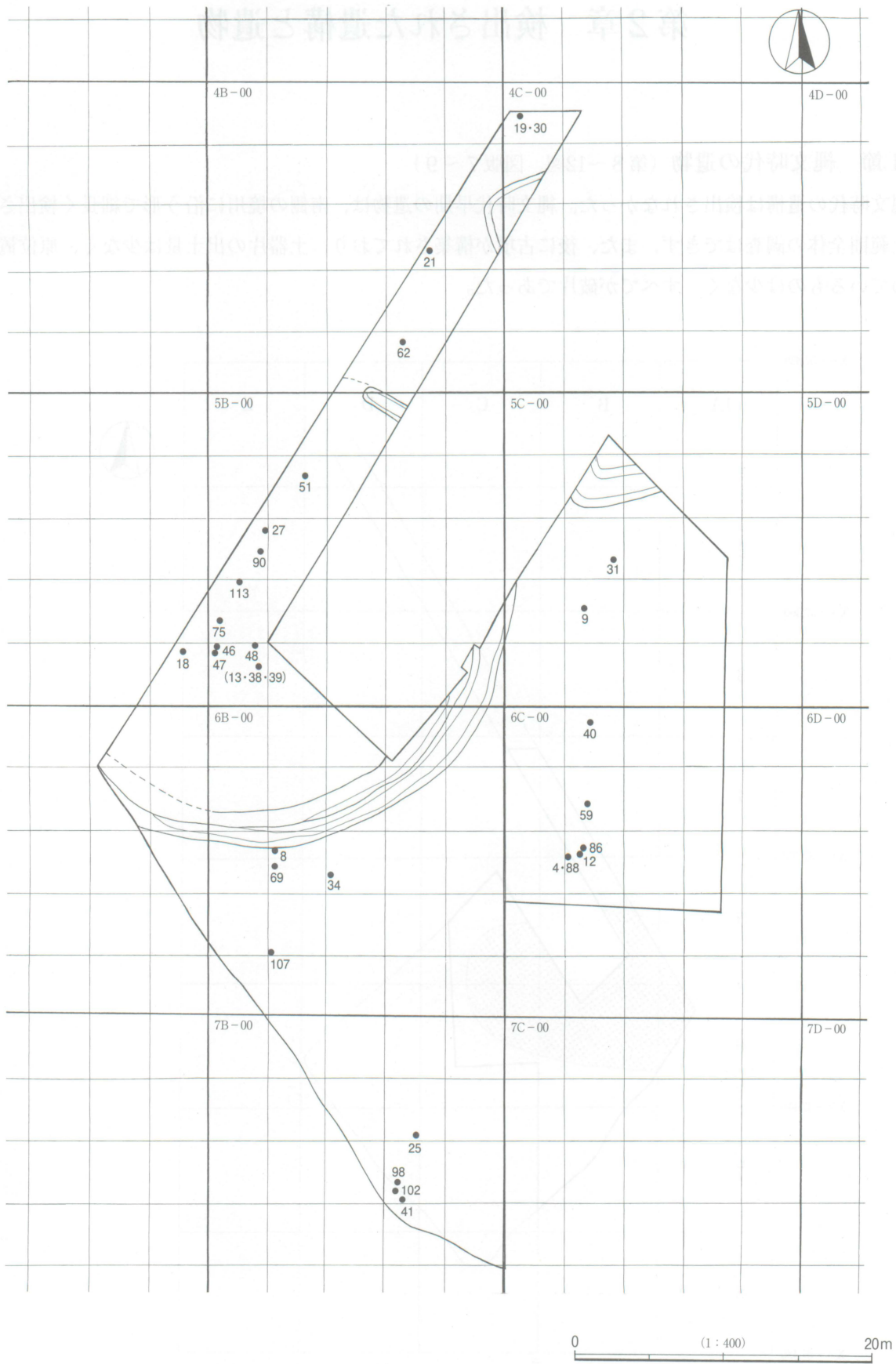
第2章 検出された遺構と遺物

第1節 縄文時代の遺物（第8～12図、図版7～9）

縄文時代の遺構は検出されなかった。縄文時代早期の遺物は、南側の境川に沿う形で細長く検出された。出土範囲全体の調査はできず、また、後に古墳が構築されており、土器片の出土量は少なく、原位置をとどめているものは少なく、すべてが破片であった。



第6図 縄文時代早期土器集中範囲



第7図 縄文時代早期土器出土分布図

縄文土器（第6～12図、図版6～9）

6B区を中心とした確認調査トレンチで、広い範囲から縄文時代早期の土器片が出土した。そのため、特に集中して出土した部分を中心に拡張して本調査を実施した。出土した遺物は縄文時代早期井草式土器から茅山下層式土器が主であった。

I群（1～97）

撚糸文系土器群を一括した。口唇部の文様、頸部の施文方法などにより、さらに細分が可能である。

1類（1～46）

口唇部に文様を施文する土器群を一括した。

A種

口唇部に文様をもつもので、さらに頸部の文様により細分が可能である。井草I式土器に比定される。

- a（1～5）は頸部に横位縄文帯が施文されているもの
- b（6～12）は頸部に斜縄文が施文されているもの
- c（13～15）は頸部に撚糸文が施文されているもの
- d（16）は頸部に押圧縄文を施したもの

B種（17～46）

頸部に文様をもたないもの。さらに胴部の施文により細分できる。井草II式土器に比定される。

- a（17～43）は胴部に縄文が施文されているもの。
- b（44～46）は胴部に撚糸が施文されているもの。

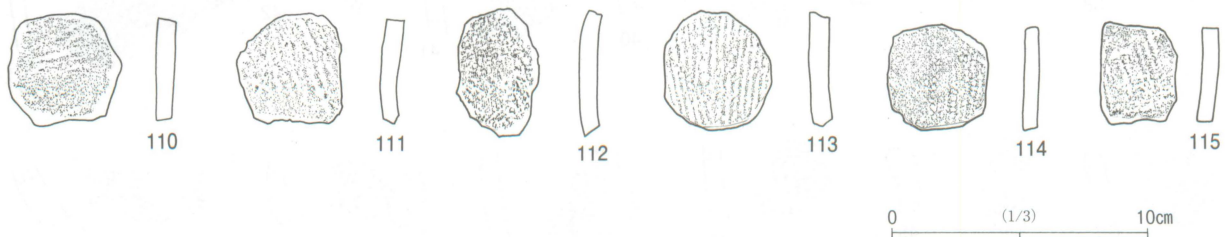
2類（50～97）

口唇部に文様を持たないもので、さらに頸部の文様の施文により細分が可能である。井草II式土器も一部含むと思われるが、主体は夏島式土器に近いとおもわれる。

- a（50～78）頸部に縄文を施文するもの。
- b（79～93）頸部に撚糸文を施文するもの。
- c（94～96）無文のもの。
- d（97）頸部以下に斜縄文を施文するもの。

II群（98）

沈線文系土器である。図示できたものは1点のみである。小破片であるが貝殻腹縁による刺突文が見られ、田戸上層式土器と思われる。



第8図 縄文土器片円板



第9図 縄文土器(1)



第10図 縄文土器(2)

Ⅲ群 (99~109)

条痕文系土器である。胎土に繊維を含む。茅山下層式土器に比定される。

底部 (47~49)

底部片を一括した。底部形状は丸底に近く、尖底にならない。Ⅰ類井草Ⅰ式土器に帰属する底部片ともわれる。

縄文土器片円板 (第8図、図版9)

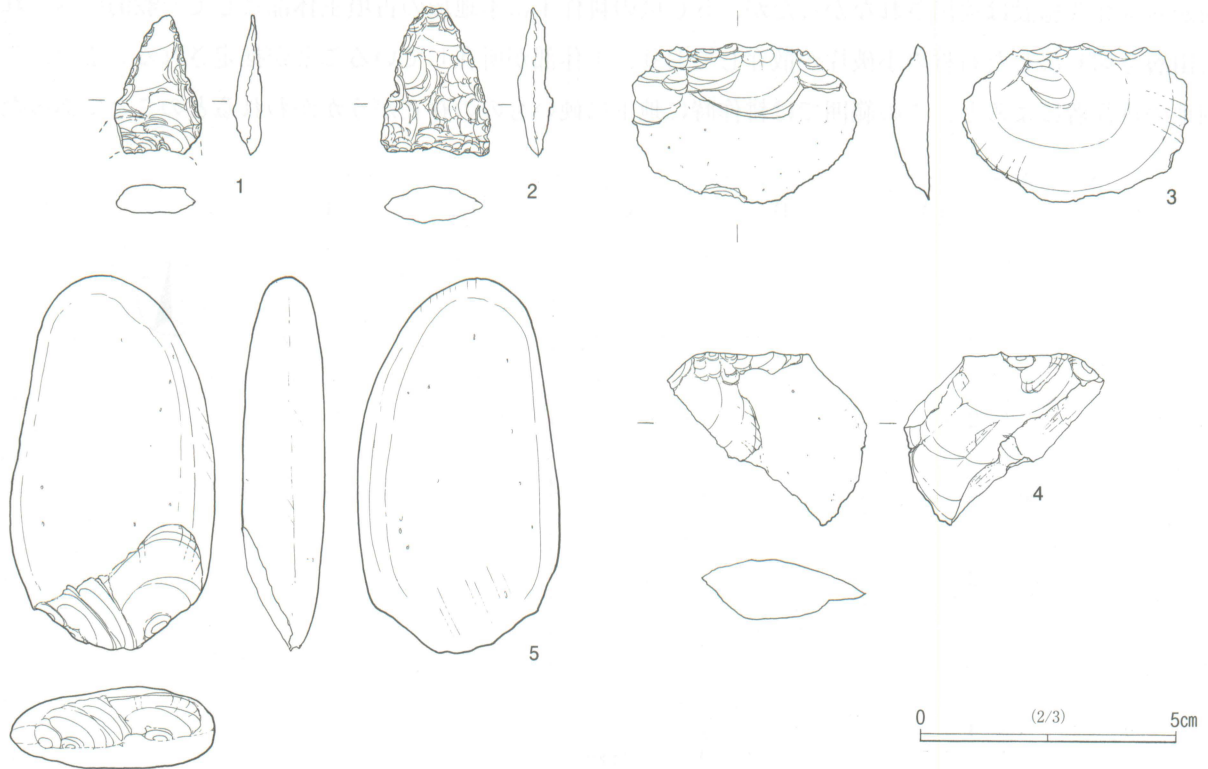
110~115は縄文土器片を利用した土器片円板である。Ⅰ群に帰属する土器片を利用したと思われる。



第11図 縄文土器 (3)

石器（第12図、第2表、図版9）

5点が図示できた。1・2は石鏃で、1は脚を欠損している。2は先端部と側縁の一部を欠損している。3・4は剥片である。5は礫石器で、先端部を加工している。



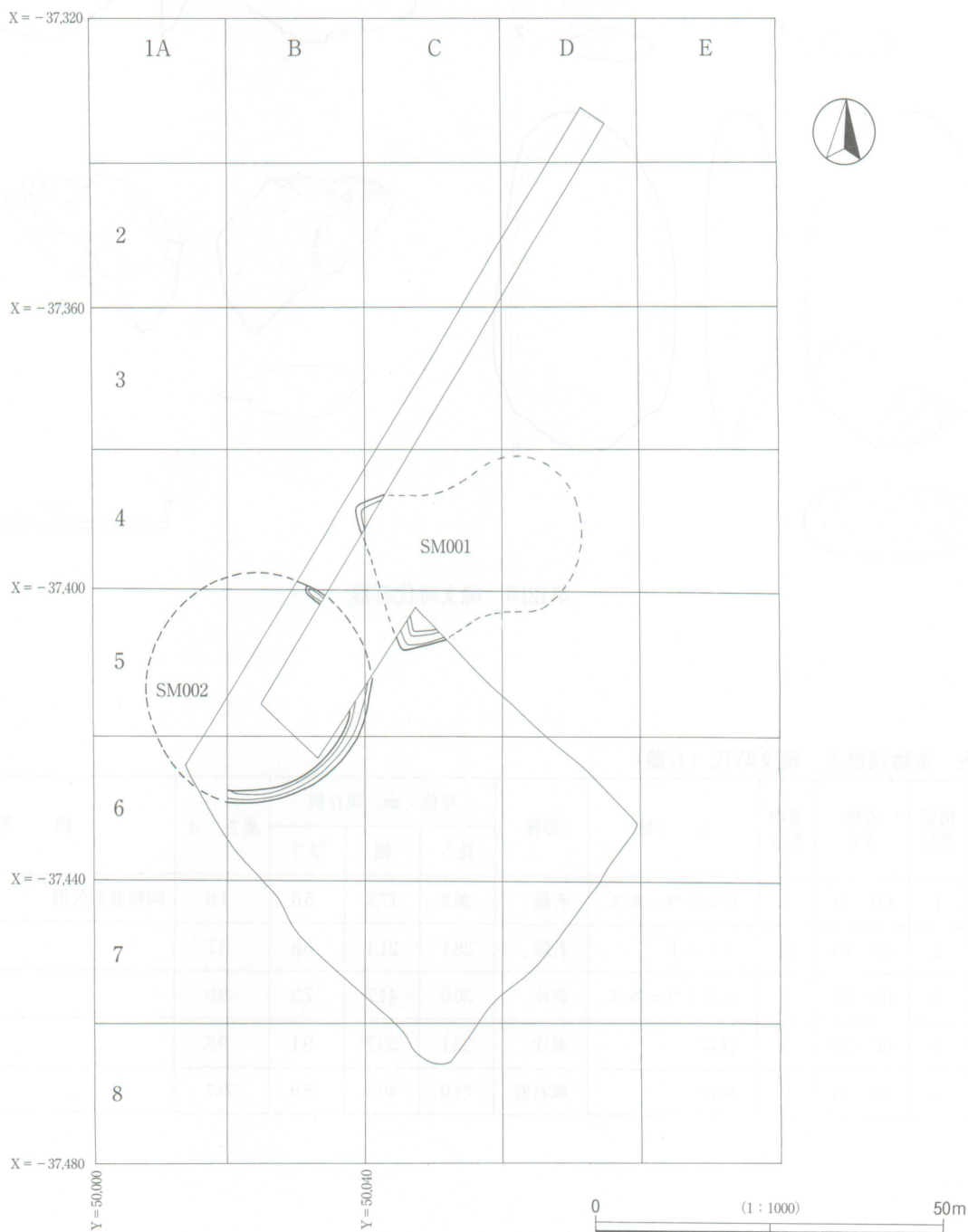
第12図 縄文時代石器

第2表 遺物観察表 縄文時代（石器）

挿図 番号	掲載 番号	遺構 番号	遺物 番号	石 材	器 種	単位：mm、現存値			重さ：g	備 考
						長さ	幅	厚さ		
12	1	6B-44	1	ホルンフェルス	石鏃	26.2	17.3	5.6	1.9	両脚部を欠損
12	2	6B-64	14	チャート	石鏃	28.1	21.4	6.8	3.7	
12	3	6B-20	4	ホルンフェルス	剥片	30.6	44.7	7.2	9.9	
12	4	6C-22	4	頁岩	剥片	33.1	39.7	9.1	9.8	
12	5	6B-44	2	砂岩	礫石器	71.0	40.3	15.9	59.7	

第2節 SM001 (第3・13・14図、図版2・3)

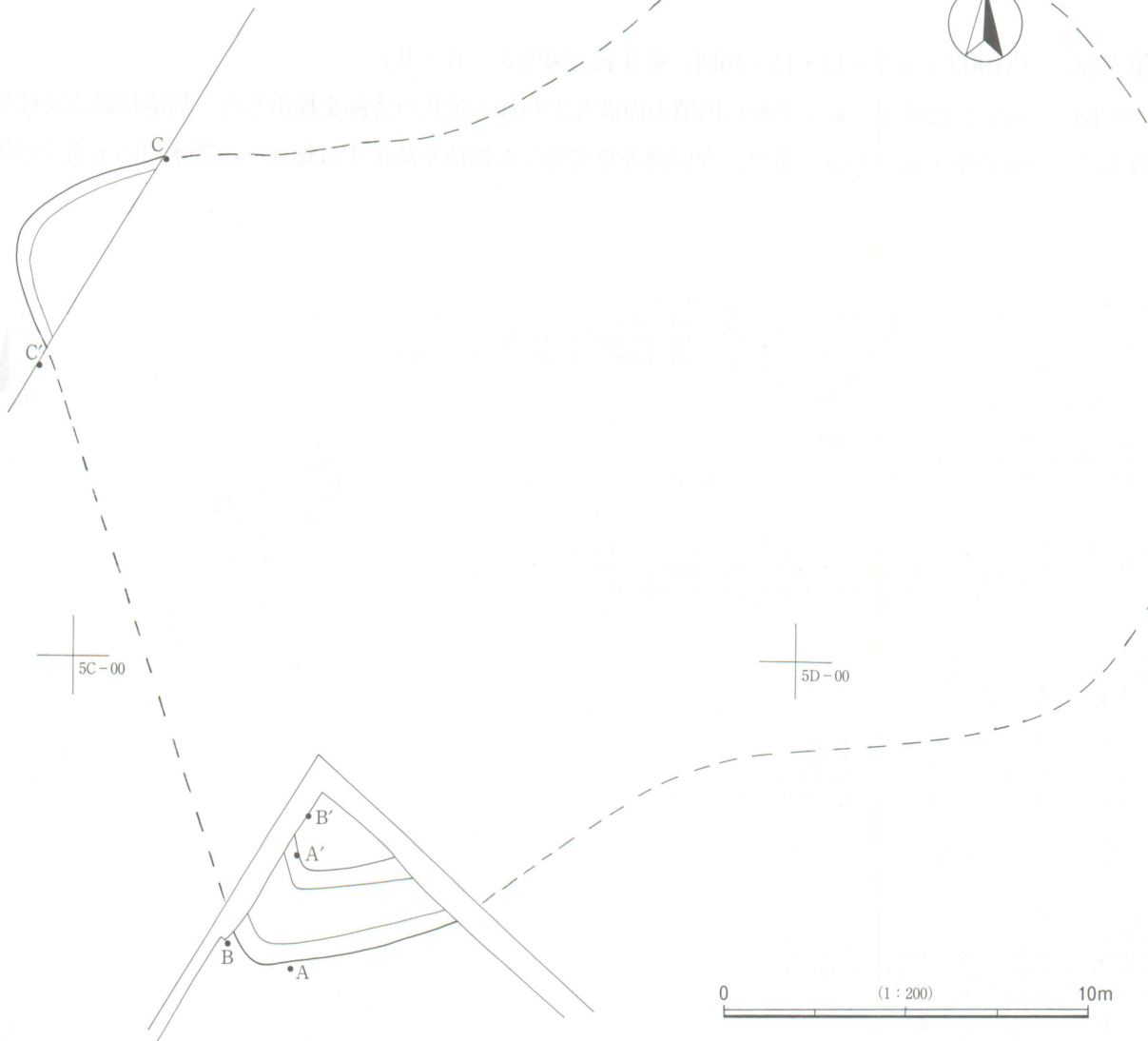
5C区に設定した9Tから古墳の周溝と思われる溝跡を検出した。トレンチは幅2mで長さも短かったため、まずこの周囲を拡張して形状と溝跡の性格の確認に努めた。その結果、溝壁が直線的に曲がるのが分かり、一方で4B・4C区の管理用道路部分の調査地点から西側の周溝部分と推定される溝の一部が検出された。この両者が同一の古墳であるとすると、一辺20mほどの方墳と想定されたが、当古墳群及び周辺古墳群には方墳が確認されていないため、前方後円墳の前方部前面の周溝と推定した。今回の調査範囲からは埋葬施設は検出されなかったが、5C区の耕作土に本地域の古墳主体部として一般的にみられる成田層を切り出した石材の小破片が散在しており、主体部が所在していることが推定される。また、この畑地の耕作者によると、この範囲では耕作時に地下に硬いものの存在がうかがわれるとのことであった。



第13図 古墳検出状況図

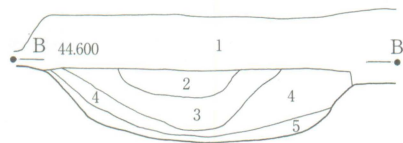
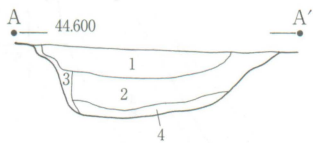
4C-00

4D-00



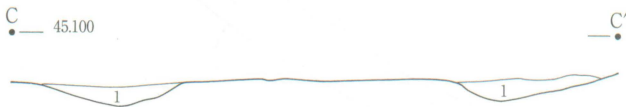
A-A'

- 1層 褐色土 きめ細かく、ローム粒・ロームブロックを含む
- 2層 暗褐色土 きめ細かく、締まりがある、微量のロームと1cmほどのロームブロックを含む
- 3層 黄褐色土 きめ細かく、締まりない、ローム粒・ロームブロックを多量に含む
- 4層 黄褐色土 きめ細かく、ロームブロックを含む



B-B'

- 1層 耕作土
- 2層 暗褐色土 きめ細かく、硬い、ローム粒を斑に含む
- 3層 灰褐色土 きめ細かく、硬い、5mmほどのロームブロックを含む
- 4層 褐色土 きめ細かく、5mmほどのロームブロックを微量含む
- 5層 黄褐色土 きめ細かく、硬い、ローム粒・ロームブロックを多量に含む



C-C'

- 1層 暗褐色土 きめ細かく、硬い、1~2cmほどのロームブロックを微量含む

0 (1:80) 4m

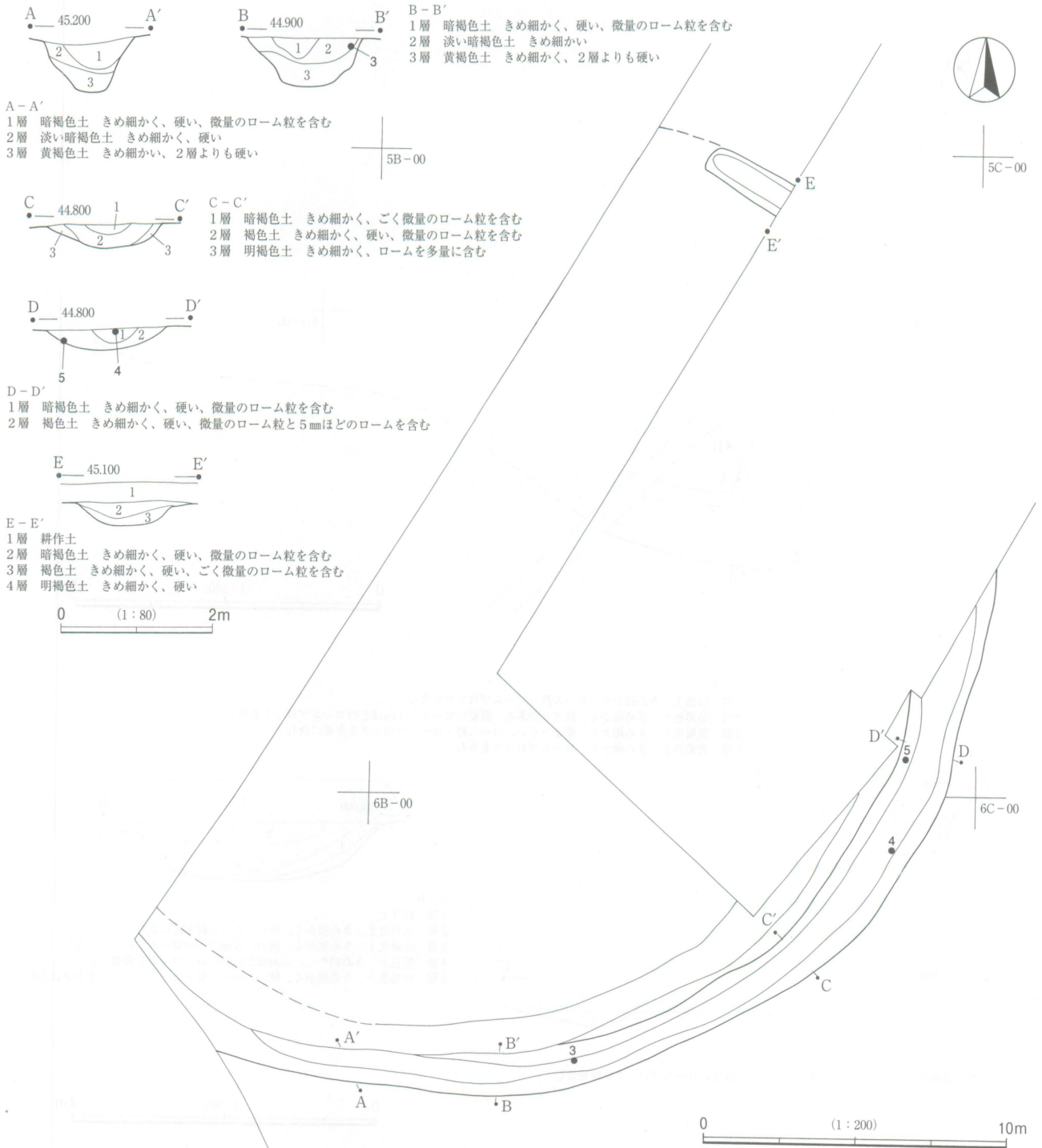
第14図 SM001検出状況図・土層断面図

したがって、この範囲に石室による主体部があると推定することができる。

SM001に伴う遺物で、図示できるものは皆無であった。

第3節 SM002 (第3・13・15・16図、第3表、図版3～6・9)

6B区に設定した確認トレンチから円墳の周溝と思われる弦状の溝跡を検出した。周溝は縄文時代早期の土器包含層の中央部にある。また、今回調査を実施した畑地や隣接する畑地への散水用の水道管が周溝



第15図 SM002検出状況図・土層断面図

に添うように埋設されていた。調査時が冬期であり、周辺の農家で使用しているため凍結を防ぐ必要もあり、水道管の周りは多少広く残して調査を実施した。したがって、周溝の完掘はできない部分が生じた。古墳の東側周溝はほぼその全容は確認できたが、西側周溝は検出できなかった。

SM002に伴う遺物は土師器1点、須恵器2点と埴輪1点を図示した。

第4節 古墳時代の遺物

土師器（第16図、第3表、図版9）

土師器は2点が図示できた。1はSM002からの出土で、2は11Tからの出土である。

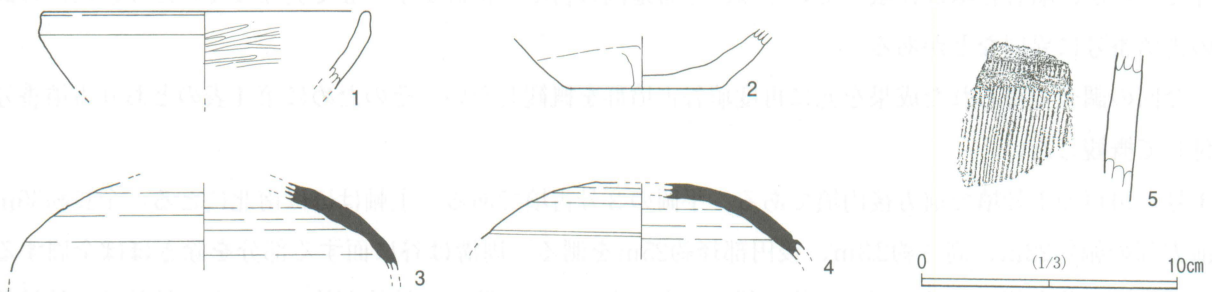
1はSM002から出土した土師器坏形土器の口縁部片である。復元口径は12.7cm、残存器高2.9cmを測る。外面は丁寧なヘラナデ・ミガキを施しており、内面はヘラナデを施している。2は土師器甕形土器の底部の小片である。底径は復元であるが6.3cmを測る。内面はナデ調整、外面の底部周囲はヘラケズリにより整形している。胎土は白色砂粒を含み、やや粗である。

須恵器（第16図、第3表、図版9）

須恵器は2点が図示できた。今回の調査で出土した須恵器はSM002から出土したこの2片のみであった。3・4は須恵器坏蓋片である。両者ともに天井部を欠損する。外面は回転ヘラケズリ、内面回転ナデによって成形している。胎土は微量の砂粒を含むが精緻である。2点ともに小破片である。

埴輪（第16図、第3表、図版9）

SM002から1点が出土した。今回の調査で出土した埴輪片はこの1点のみであった。円筒部の小片で、円筒埴輪か形象埴輪かは不明である。上部に凸帯部の剥離痕がみられる。胎土は緻密で焼成も大変よい。



第16図 古墳時代の遺物

第3表 遺物観察表（土師器・須恵器・埴輪）

挿図 番号	掲載 番号	遺構 番号	遺物 番号	種別	器種	遺存度 %	単位：cm、()は復元値、現存値			色調		胎土	焼成	整形・調整		備 考	
							口径・ 長さ	最大径	底径・ 幅	器高・残存 高・厚さ	外面			内面	外面		内面
16	1	SM002	14	土師器	坏	25	(12.7)	—	—	2.9	橙色	橙色	緻密、 赤色粒	良好	ヘラナデ、 ミガキ	ヘラナデ	
16	2	11T	2	土師器	甕	20	—	—	(6.3)	2.0	橙色	橙色	粗、 白色砂	良好	ナデ	ヘラケズリ	
16	3	SM002	6、14	須恵器	坏蓋	30	25	—	—	(2.9)	暗灰白色	暗灰白色	緻密、 白色砂	良好	回転ヘラケ ズリ	回転ナデ	
16	4	SM002	1、7	須恵器	坏蓋	30	25				暗灰白色	暗灰白色	緻密、 白色砂	良好	回転ヘラケ ズリ	回転ナデ	
16	5	SM002	13	埴輪	円筒部	破片	—				暗黄褐色	暗黄褐色	緻密	良好	ハケ	ナデ	凸帯の剥離痕あり

第3章 まとめ

縄文時代早期の遺物

縄文時代早期の井草Ⅰ式から茅山下層式の土器群が出土した。境川の北側の左岸台地上には、多くの縄文時代早期の遺跡が認められている。本遺跡もそれら遺跡群の一つと思われる。今回の発掘調査では遺構は全く検出されなかったが、耕作により深度まで攪乱が進んでいることも、遺構の残存状態が悪い理由と思われる。

遺物は縄文時代早期撚糸文系土器群が主で、井草式に属するものである。Ⅰ群Ⅰ類としたものは口縁部の破片で、すべてが小破片であった。口唇部から口縁部までの文様施文によって分類をした。これらは井草Ⅰ式に属するものである。Ⅰ群Ⅱ類としたものも全てが口唇部から口縁部にかけての小破片であった。これらは井草Ⅱ式に属するものと思われる。Ⅱ群とした土器は1点のみであったが、貝殻腹縁による刺突文がみられることから、沈線文系土器群の田戸上層式土器と思われる。Ⅲ群とした土器は条痕文系土器で、内外面に貝殻条痕文をもつ。茅山下層式土器に属する。底部片が3点出土した。丸底を呈する。縄文土器片円板が6点出土した。胴部の破片で明確な所属時期は不明であるが、Ⅰ群Ⅰ類に属するものと思われる。

古墳時代の遺構と遺物（第3図、第4表）

本古墳群は、第1章第2節でもふれたが、川戸 彰らによる発掘がその最初の調査であるが、川戸の報告した上代文化の報文では古墳番号・古墳測量図に混乱があり、その後の古墳位置に混乱を来している。その後、平岡和夫によって行われた九十九里地域全体の古墳群調査は九十九里地域全域をテーマにした労作であるが、埴谷古墳群に限っていえば、分布地図の古墳の位置がⅠ・Ⅱで異なっていたり、川戸の調査の古墳番号に異同などがある。

今回の調査で得られた成果を元に再度埴谷古墳群を概観したい。そのために第4表のとおり古墳番号を付して概観したい。

1号 川戸の1号墳で前方後円墳である。平岡の3号古墳である。主軸はほぼ南北にとる。全長約36m、前方部の幅約22m、高さ約2.3m、後円部径約25mを測る。周溝は谷に面する部分を除きほぼ全周すると思われる。前方部全面及び西側、後円部の石室のある部分を除いて埴輪が検出された。埴輪は円筒埴輪、形象埴輪がある。形象埴輪には武装人物埴輪、馬、家形埴輪など大型のものがみられる。武装埴輪には衝角付兜がみられる。後円部墳頂から直刀1本、土師器片1点が発見された。石室は後円部から検出され、刀子片1、鉄鏃3、金環2、須恵器（脚付？）1、前室から耳環1、須恵器2が出土した。

2号 川戸の2号墳で円墳である。平岡の4号古墳である。古墳の所在位置は川戸による報告の位置が事実とすると平岡の指摘のとおり諸木内古墳群と重複する。従って方位は間違いのないものとして図示した。径約24m、高さ約4m弱を測る。周溝は全周すると思われる。石室は墳頂部の南側から検出された横穴式石室である。出土遺物は、後室から刀子1、鉄鏃3、不明鉄製品2が検出された。前室からは人骨片及び歯（臼歯）2、直刀1、鉄鏃17、土師器1、須恵器1が出土している。前室、後室両室にハマグリの散乱がみられた。

3号 川戸の3号墳で円墳である。平岡の5号古墳である。2号のさらに東南に位置する。川戸の調査時

点でも既に壊滅寸前であった。径は約12m、高さ1mを測る。発掘の結果は遺構、遺物ともに発見されなかった。

4号 川戸による残存している前方後円墳である。平岡の2号古墳である。現在も遺存している。墳丘長32.5m、前方部幅17.2m、高さ2.2m、後円部径19.9m、高さ2.6mを測る。墳丘北側、後円部のくびれ部付近に盗掘坑がある。後円部の南側は現道によって切られている。前方部の北側と南側に周溝と思われる痕跡が見られる。

5号 川戸の報告では触れられていない。平岡の1号古墳である。埴谷古墳群の中で現在確認できる古墳としては最も北西に位置する。平岡の調査時に既に削平が進んでおり、今回の調査時では古墳の残存による地膨れも確認できなかった。しかし、調査を見学された地元の方の話では川戸の調査の数年後に開墾のために削平し、その時には石室や遺物は出土しなかったとのことであった。

6号 (SM001) 当初方形のコーナーが検出され、これだけでは方墳なのか前方後円墳なのかの判別はできなかったが、本地域には方墳の確認はされておらず、方墳は境川の右岸からのみで調査されていることから、SM001は前方後円墳と推定される。したがって、調査地と道路をはさんで所在する2号墳を含め埴谷古墳群には前方後円墳4基と円墳4基が確認できたことになる。

7号 (SM002) 径約30mを測る円墳である。周溝の一部を調査したのみで、埋葬施設は検出されなかった。注目すべきはSM002から埴輪片が1点出土していることである。川戸が「興味ある事は石室を有する古墳には埴輪は伴わず(成東・不動塚、松尾・5号墳、同権現塚古墳)、これに対して埴輪を伴う古墳からは石室の発見が明らかにされていない」と述べているとおり、SM001には石室の所在が想定されているが、一方SM002には石室はなかったものとも考えられ、これは埴輪片が出土していることとも符合する。

埴谷古墳群については、川戸、平岡によって発掘および古墳群の整理が進められてきた。しかし、前述のとおり両者の古墳番号と古墳の位置については異なっている。第3図は今回調査を実施したSM001、SM002を加えた図面で、位置は平岡が1993年に発表したものに今回の発掘調査による成果を追加したものである。川戸が上代文化で報告した3基の前方後円墳は、1号墳は川戸が発掘調査を実施した古墳、「更に他の1基」とした古墳は現存している前方後円墳、川戸が「その中の1基」とした古墳については「早く開墾され、現在畑地と化しており、分布調査を行った際、後円部上で直刀片を採拾している。また、墳丘は一面に埴輪片の散布が夥しく、円筒埴輪、形象埴輪の配列された古墳であった事がしられる。」と述

第4表 埴谷古墳群 古墳一覧

	本報告	川戸調査 (注1)	墳形	長さ、径	埋葬施設	平岡Ⅰ (注2)	平岡Ⅱ (注3)		備考
1		埴谷1号墳	前方後円墳	長さ約36m	石室、刀子、石鏃	4	3号古墳		
2		埴谷2号墳	円墳	径約24m	石室、埴輪なし	3	4号古墳	平岡Ⅱの図面になし	
3		埴谷3号墳	円墳	径約12m	遺構・遺物なし	5	5号古墳		現存せず
4		更に他の1基	前方後円墳		石室	2	2号古墳	盗掘坑あり	道路反対側に残存
5			円墳			1	1号古墳	微少な地膨れ	最も北、近年削平か?
6	SM001	—	前方後円墳	長さ約30m	石室?、埴輪なし直刀	—	—		
7	SM002	—	円墳	径約30m	直葬?、埴輪片	—	—		水道管理設時に墳丘あり?
8		その中の1基	前方後円墳		後円部直刀片、 墳丘一面に埴輪片	—	—		

注1 川戸彰 「千葉県山武町埴谷古墳群調査(概要)」 上代文化第27輯
川戸彰 「古墳を歩く 39 埴谷古墳群」 東京新聞 1990年9月29日版
注2 平岡和夫 「千葉県九十九里地域の古墳研究」 山武考古学研究所
注3 平岡和夫 「千葉県九十九里地域の古墳研究 II」 山武考古学研究所

べている（8号）。埴輪片の出土はSM002からの1点のみでSM001からは検出されていない。このことからSM001がこの前方後円墳の可能性はない。更に、SM001の埋葬施設と推定される石室が隣接する畑地に存在していることが推測されることからその可能性はない。

また、地元の方が設置した水道施設の埋設時期についてであるが、水道管の埋設位置が、SM002の周溝覆土中であることから、水道管の埋設に当たってSM002の墳丘を避けて埋設した様子が見られることなどから、川戸の調査の直後に行われたと思われ、その時点ではSM002の墳丘は残存していたと推定される。

今回の調査により埴谷古墳群で確認できたものは前方後円墳4基、円墳4基であったが、『千葉県重要古墳群測量調査報告書山武地区古墳群（4）』によると前方後円墳4基、円墳12基との記載がある。したがって、昭和31年の川戸による調査、平成4年の千葉県教育委員会による調査、そして今回の調査の間の古墳消滅は、平成4年の調査から今回の調査の期間がもっとも著しいことが推測される。今回の調査の成果を含めて、川戸、平岡による調査を参考に、確認できた古墳に番号を再振り分けしたものが第3図・第4表である。本来はもっと数多くの古墳が所在していたと思われるが、現在は第4表で第4号とした前方後円墳のみ残存している。

これらの古墳のあり方、出土遺物から、今回調査を実施したSM001、SM002の2基の古墳は6世紀末から7世期初頭に築造されたものと思われる。

川戸 彰が調査をし、上代文化に発表した概報には、墳丘測量図は掲載されているが、遺物及び遺物出土状況図の掲載はない。しかし、第1章第2節の注に記載したとおり、現在千葉県立東金高等学校に保管されている遺物が埴谷古墳群出土の遺物であることがわかった。

古墳番号	古墳名	墳形	築造時期	出土遺物	調査状況
SM001	前方後円墳	前方後円墳	6世紀末～7世紀初頭	埴輪片	調査済
SM002	前方後円墳	前方後円墳	6世紀末～7世紀初頭	埴輪片	調査済
SM003	円墳	円墳	6世紀末～7世紀初頭	埴輪片	調査済
SM004	円墳	円墳	6世紀末～7世紀初頭	埴輪片	調査済
SM005	円墳	円墳	6世紀末～7世紀初頭	埴輪片	調査済
SM006	円墳	円墳	6世紀末～7世紀初頭	埴輪片	調査済
SM007	円墳	円墳	6世紀末～7世紀初頭	埴輪片	調査済
SM008	円墳	円墳	6世紀末～7世紀初頭	埴輪片	調査済
SM009	円墳	円墳	6世紀末～7世紀初頭	埴輪片	調査済
SM010	円墳	円墳	6世紀末～7世紀初頭	埴輪片	調査済
SM011	円墳	円墳	6世紀末～7世紀初頭	埴輪片	調査済
SM012	円墳	円墳	6世紀末～7世紀初頭	埴輪片	調査済
SM013	円墳	円墳	6世紀末～7世紀初頭	埴輪片	調査済
SM014	円墳	円墳	6世紀末～7世紀初頭	埴輪片	調査済
SM015	円墳	円墳	6世紀末～7世紀初頭	埴輪片	調査済
SM016	円墳	円墳	6世紀末～7世紀初頭	埴輪片	調査済
SM017	円墳	円墳	6世紀末～7世紀初頭	埴輪片	調査済
SM018	円墳	円墳	6世紀末～7世紀初頭	埴輪片	調査済
SM019	円墳	円墳	6世紀末～7世紀初頭	埴輪片	調査済
SM020	円墳	円墳	6世紀末～7世紀初頭	埴輪片	調査済

写 真 图 版



周辺航空写真



調査前近景



SM001周溝全景



SM001西側周溝全景・土層断面C-C'



SM001周溝土層断面A-A'



SM002東側周溝検出状況



SM002東側周溝全景



SM002東南側周溝全景



SM002土層断面A-A'



SM002土層断面B-B'



SM002西侧周溝全景



SM002周溝覆土残存状况



トレンチ内遺物出土状況 3T



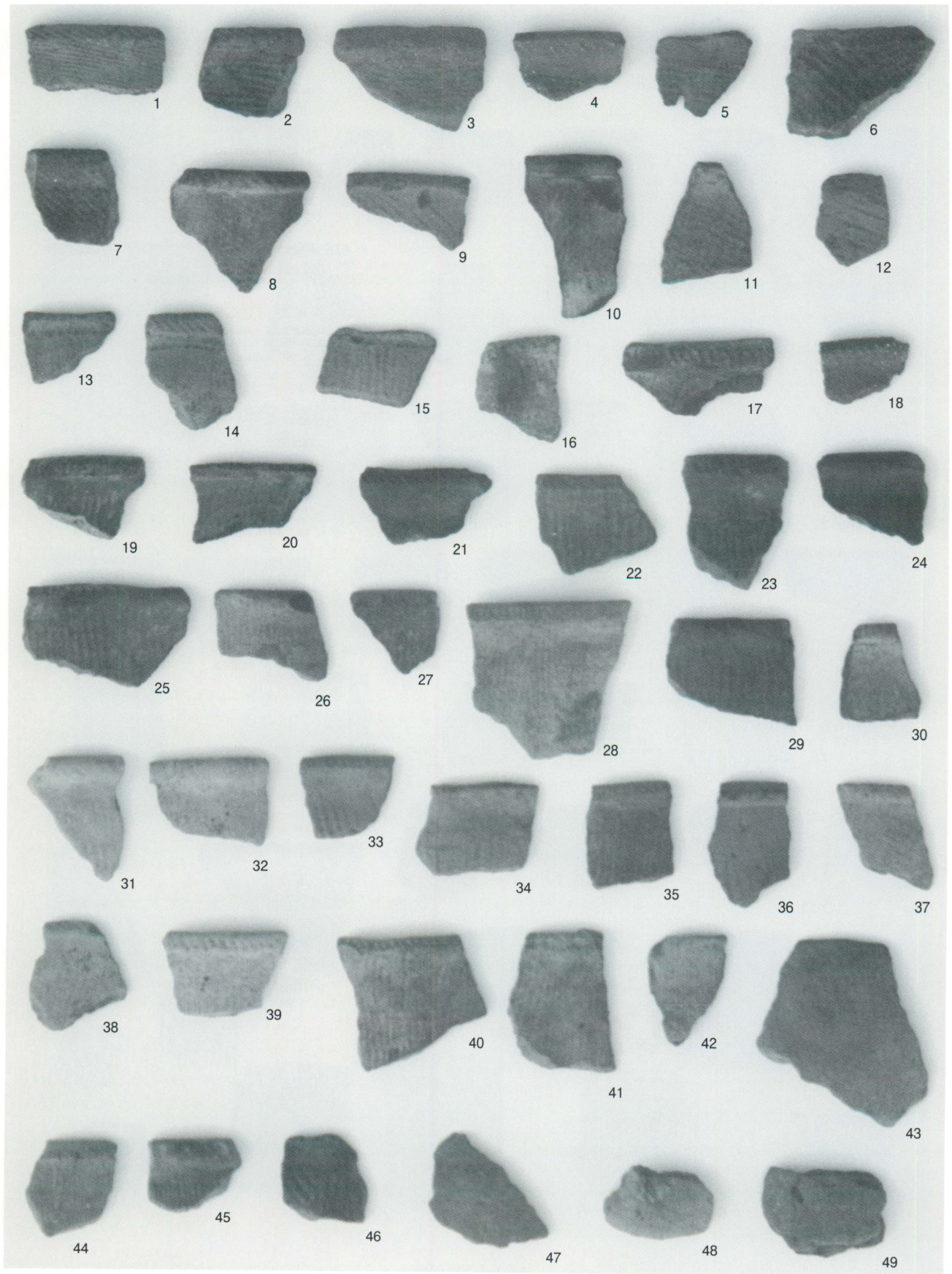
トレンチ内遺物出土状況 10T



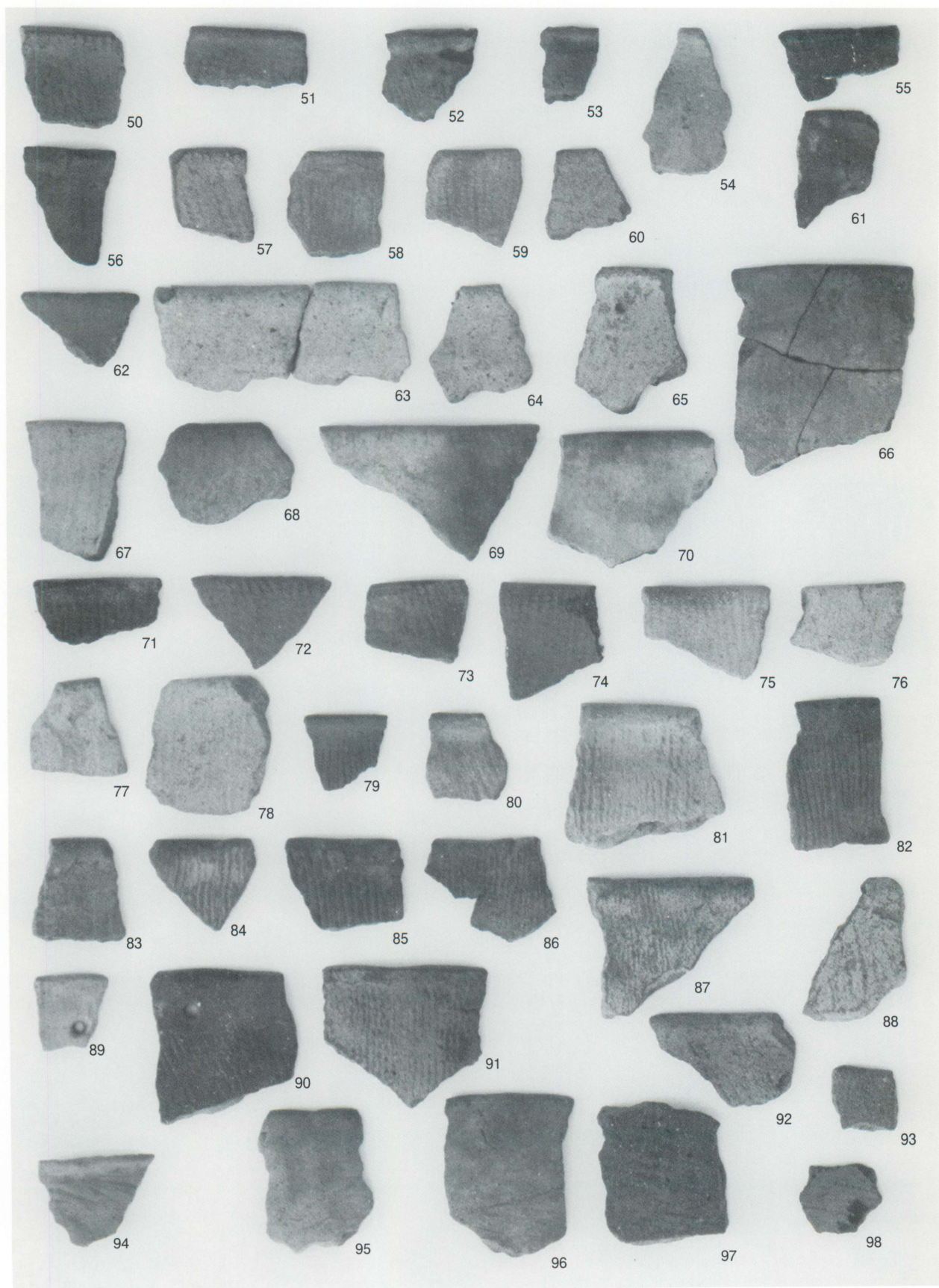
下層土層断面 13T



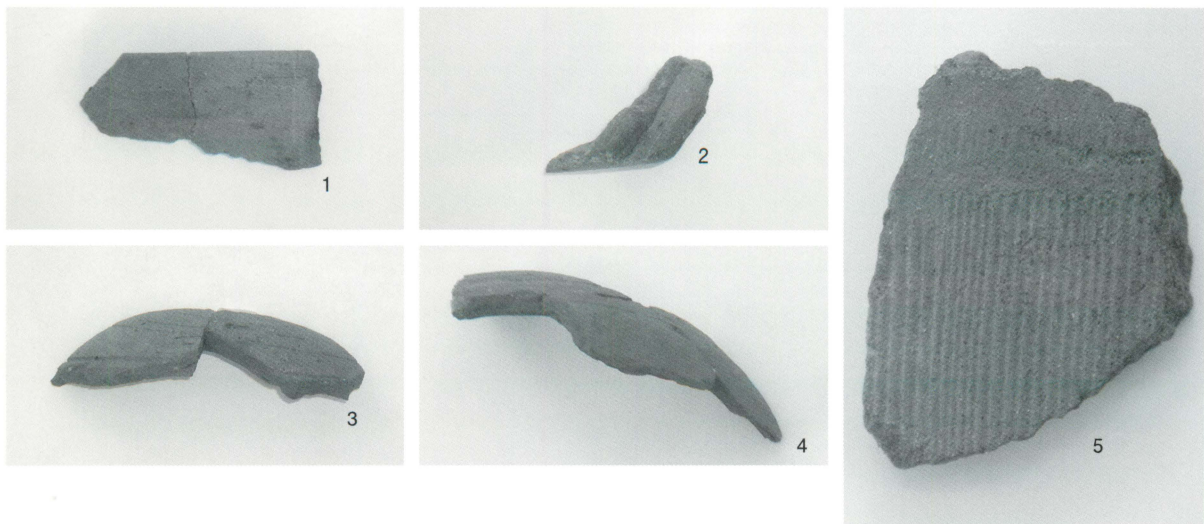
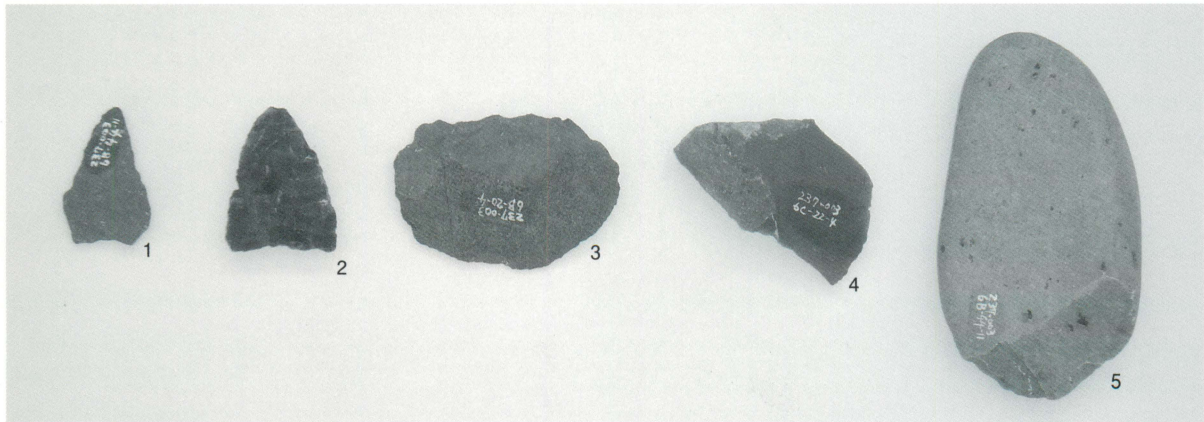
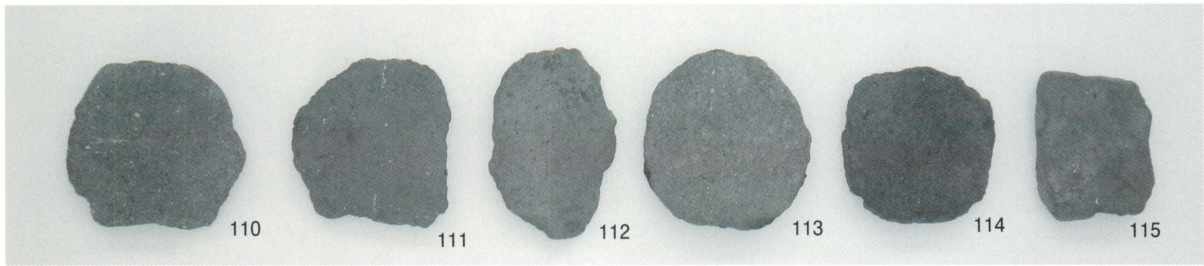
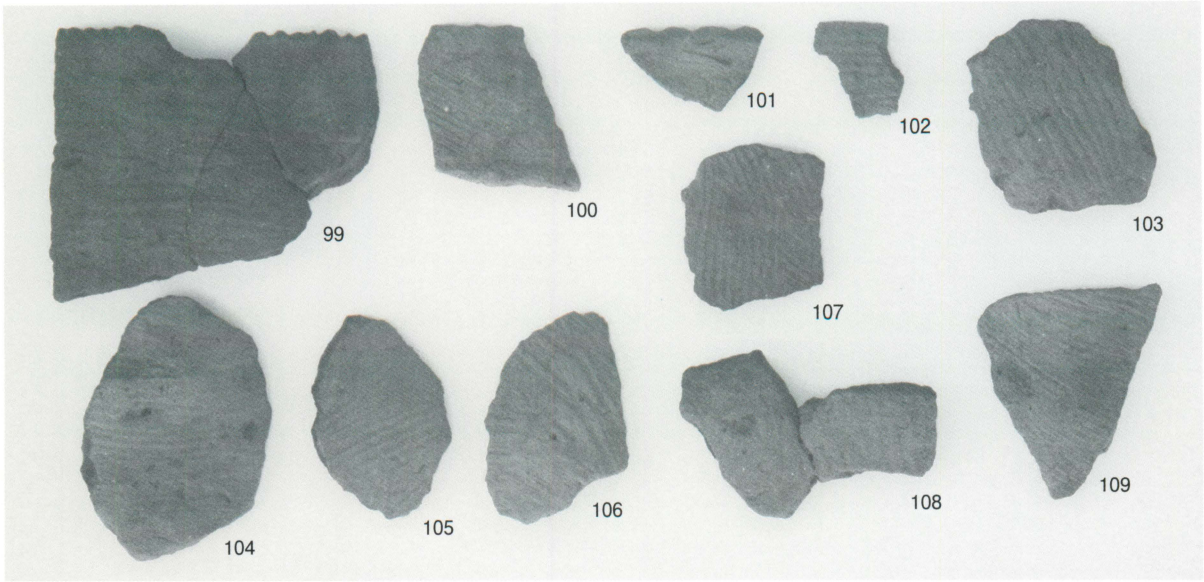
調査区全景 (水槽本体部分)



繩文土器 (1)



縄文土器 (2)



縄文土器 (3)・縄文土器片円板・縄文時代石器・古墳時代の遺物

報告書抄録

ふりがな	さんむしはにやこふんぐん							
書名	山武市埴谷古墳群							
副書名	北総中央農業水利事業2号調整水槽工事に伴う埋蔵文化財調査報告書							
巻次								
シリーズ名	千葉県教育振興財団調査報告							
シリーズ番号	第663集							
編著者名	相京邦彦							
編集機関	財団法人千葉県教育振興財団 文化財センター							
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809番地の2 TEL 043-424-4848							
発行年月日	西暦2011年3月25日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
はにやこふんぐん 埴谷古墳群	さんむしよこたあざひよけ 山武市横田字日除 682-2ほか	237	003	35度 39分 53秒	140度 22分 58秒	20091201～ 20100130	2,800㎡	調整水槽建設 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
埴谷古墳群	包蔵地	縄文時代 古墳時代	縄文時代早期遺物包含層 古墳周溝2基		縄文時代早期撚糸文系土器 古墳時代土師器、須恵器、 埴輪		縄文時代早期の土 器群と古墳周溝跡 を検出	
要約	<p>縄文時代早期撚糸文土器（井草式期）の包含地を確認した。</p> <p>また、墳丘が削平された前方後円墳1基と円墳1基を確認した。埴谷古墳群は境川の最奥部に位置しており、昭和31年に調査が実施されていたが詳細は不明であった。今回の調査で前方後円墳4基、円墳4基が現存していることが分かった。</p>							

千葉県教育振興財団調査報告第663集

山武市埴谷古墳群

— 北総中央農業水利事業2号調整水槽工事に伴う埋蔵文化財調査報告書 —

平成23年3月25日発行

編 集 財団法人 千葉県教育振興財団
文化財センター

発 行 関東農政局北総中央農業水利事業所
八街市八街に456-1

財団法人 千葉県教育振興財団
四街道市鹿渡809番地の2

印 刷 株式会社 正文社
千葉市中央区都町1-10-6
